

視点1

「主体的な語り合い」が育む保育の質 〜保育カンファレンス再考〜

松永静子

(大学教員)

「保育を開く」カンファレンス

医療・看護の世界では日常用語のようにカンファレンスという言葉が使われているが、実際に職場に定着したのは、今から五十年余り前であったという。医療・看護の世界ではチームの協力的体制、協働なしには患者のケアが十分に行われない。このカンファレンスはそれぞれの専門職の情報提供をもとにコミュニケーションが図られる場であり、患者のより良いケアを目指してディスカッションする場でもある^{注1}。

保育におけるカンファレンスについては、森上は稲垣らが提唱した授業カンファレンスの試みをもと

に「保育を開く」上で最も有効であると述べている。「保育を開く」意味については、保育現場で起こっているさまざまな出来事を生かすように保育者の心と体が開かれていることであり、「私の実践」も他者のそれと交流しながら、省察を重ねる中でより適切なものになっていくことであると述べている^{注2}。

二〇〇八年に改定された保育所保育指針では保育の専門性の向上がうたわれ、園内研修は施設長の責務としている。以来、園内研修は保育の現場でさまざまな方法で盛んに行われるようになった。しかし園内研修が現場の実践に生かされているかを問うたアンケート(二〇一二年)では、保育士らも施設長

松永静子(まつながしずこ)
白梅学園大学子ども学部准教授。

も、十分に生かされていないと回答していた^{注3}。今日の前にいる子どもの保育は日々予想通りにはいかないのが当然であり、保育者は試行錯誤しながらの実践となる。これらを工夫したり、また創造したりするのが保育であるとするなら、自分一人で抱え込むことなく、カンファレンスにより他者と交流し合い、気付き、見直すことがより重要となる。

保育所におけるカンファレンスの試み

ここでは特に保育所におけるカンファレンスを取り上げて述べていきたい。保育所は勤務がシフトしており、話し合いの場の設定（特に時間）が難しい。カンファレンスは一堂に会して話し合う方法であるが、それを定例的に持てるか、事前の情報共有について徹底を図れるかが課題なのである。その点は、例えば一クラスの担任保育士だけにメンバーを限定したり、各クラスから一名出て少人数グループでのカンファレンスにしたりすることで、継続的に行うことが可能となる。

筆者はこれまで「自立的な園内研修に関する研究」^{注4}に取り組み、若手の保育士（新卒後勤務年数5年内）対象に、実践場面のビデオ映像を通して保育を振り返るカンファレンスについて分析し考察を行ってきた。カンファレンスにより気付いた課題に取り組み、実践を変化させていく方法は、保育士らの実践のモチベーションを高め、実践を変える行動へとつなげていた。

また、保育場面を「エピソード記述」として記録し、各クラスから一名出てエピソード記述をもとにカンファレンスを積極的に取り入れ、積み重ねてきた岩屋保育園（京都）の例もある。園長の室田氏はその著書の中で、「エピソード記述をカンファレンスの資料にして、問題解決型ではなく、いろいろな角度からいろいろな意見を出し合うと、子どもの姿が議論の中から立ち上がってくる、『保育つて奥が深いなあ』と感慨が残る」と述べている。また、子どもの気持ちや思いを保育者がわが身のように受けとめるという基本的な態度を身に備えた所以はこの

カンファレンスの積み重ねであることは言うまでもないと述べている。つまり保育者の資質を高めることを実証的に示されている。エピソード記述を資料とするカンファレンスの蓄積が主題を深め、そのことを子ども、保護者、保育者間で共有するとしている。このことについて授業カンファレンスを試みた稲垣らも、カンファレンスの話し合いによって「いろいろな側面や問題が浮かび上がり、自分の現在が変わっていく」と、室田氏同様に教師の変化に着目している。

話し合いを深めるために

カンファレンスで活発な話し合いにならないという悩みをよく聞く。どのようにカンファレンスを進めていけば、話し合いが深められるのだろうか。保育所には勤務時間にずれがあり、担任同士であつても、保育場面での出来事やその日保護者から伝えられた情報をすべて共有することは難しく、子どもへの理解が断片的になったり、そのため子どもへのか

かわり方の違いや保護者への対応に問題が生じることもある。その上、現場は常に忙しく十分な説明の時間も互いに保障できない。カンファレンスを開く要件としては保育者同士の親密なコミュニケーションが前提である。そのためには、日々の保育のささやかなエピソードなどを何気なく他者に語ることができる人間関係づくりも必要である。

また、カンファレンスの必要性などを互いに感じているか、少しでも良い保育をしようという意思があるか、なども問われる要件である。幾つかの要件を整えながらカンファレンスを行うこと、この話し合いの土壌が、保育者のみならず子どもも保護者も含めた園の文化を創り上げることにもなっていくのである。保育者にはそれぞれの個性があり、言葉での伝え方、対話能力に大きな差がある。カンファレンスを開く時はまず保育者が自分と他者との違いを互いに受けとめ、共有することから出発したい。また保育カンファレンスでは、問題提起の有無にかかわらず、ここで語ること、語り合うことで互いの存在

が際立つこともある。保育者であると同時に一人の人として、子どもや保育者、保護者と向き合っているからこそ、語り合い、共有することの喜びや充実感が見えてくる。そして、互いの存在によりそれは鮮明になるのである。

一方で、カンファレンスによる実践のダイナミックな変化に驚かされる。学ぶ意欲のあるグループでの話し合いでは、互いの意見に触発されたり、啓発されたりすることも多い。「自立的な園内研修に関する研究」^{註4}において成果を上げていたのは、カンファレンスでエネルギーをエンパワメントし、持てる力を発揮し、実践に反映させていった例であった。

このような保育カンファレンスにしていくための幾つかの効果的な方法がある。カンファレンスの目的にもよるが、メンバー構成に工夫が必要である。若手保育者とベテラン保育者を組み合わせると、ベテラン保育者主導になりがちである。若手の保育者が自由に語れる場合は必ず用意しておきたい。また保育所は保育者以外の職種のメンバーも加わること

で、特に問題解決型のカンファレンスなどは多様な視点での議論が期待できる。

さらに、効果的にカンファレンスを進める上で最も重要なのは、保育者の主体的な語り合いである。カンファレンスで語り合うことは紛れもなく保育を振り返ることである。自分の実践に真正面に向き合い語ることに、そして互いに語り合うことから、保育者は主体的に学び、次の実践をより良いものにしていく。まさに主体的な語り合いが育む「保育の質」である。

参考文献

- 1 川島みどり他『看護カンファレンス』医学書院 二〇〇八年
- 2 森上史朗「特集 保育を開くためのカンファレンス」
『発達』68 ミネルヴァ書房 一九九六年
- 3 松永静子「保育の質を高める自立的な園内研修」園長がとらえる研修とは？」日本保育学会第65回発表論文集 二〇一三年
- 4 松永静子「保育の質を高める自立的な園内研修」日本保育学会第64回発表論文集 二〇一二年